



## この夏、あたらしい取り組みをはじめました

理事長の 大久保 昌一 先生です  
(9月30日理事懇談会で)



これまでの新しい試みとしてインターンシップ  
学生が来ました(8月20～9月6日)



3回にわたって開催した市政研究ことはじめ  
めでは講師もグループ討議に参加しました

### contents

市政研究ことはじめ 開催しました	2
ようこそ! 学生さん 関西学院大学インターンシップ	4
研究所・見聞録: 市民研究員制度にみる尼崎の心意気	5
研究日誌: 千里ニュータウン研究報告会を開催	6
TOOL BOX (第4回): ツールとしての出島	6
出島・入島: 「研究を政策にするマジックとは」	7
理事会ダイジェスト: 小さな研究所の更なる発展のために	7
事務局から: ニュースレターについてアンケート行いました	8

# 市政研究ことはじめ 開催しました

8月27日から9月3日、10日のそれぞれ午後6時30分から、「市政研究ことはじめ」をテーマにワークショップを開きました。毎回30人近い参加者で、講師からの話題提供やグループでの話し合いなどを通して、市政研究活動の意味や政策形成のつながり、様々な人々のネットワークをつくることなどについて考えました。

この催しは、「市民に開かれた調査研究機関」という市政研究所の目標を市民や研究者と共に進めていこうと開いたものです。8月27日と9月3日には、研究所で実習中の関西学院大学のインターンシップ生が進行役を務め、今回の取り組みへの若い感覚や意見の反映を図りました。

## アンケート調査は政策づくりにどうつながるか

8月27日(於中央公民館)は、「アンケート調査は政策づくりにどうつながるか」をテーマに、京都女子大現代社会学部の井上真理子教授から、



まずひとつの政策が決定され事業が実施されるまでの間には、問題の確認・課題に設定・事業目的や事業案の作成などの過程があることについて話されました。続いて、その政策過程の中で常に立ち返らねばならないのが政策によって解決を図ろうとする社会や住民が抱えている問題であること、その問題はどのように把握し定めるのか、そのために実施されている調査にはどんな方法があり、どんな限界を持っているかなどを話されました。

この話の後、4グループに分れ、アンケート調査に対する市民の見方、調査が活かされるチェックポイントなどについて話し合いました。各グループからの報告では、現状の行政のアンケートについて政策過程のどの段階で行われているのかがあいまい、アンケートの実施に対する評価が必要、低い回収率で信用はあるのか、設問設計や分析の場への市民参加も必要などが報告されました。

## 市政への市民参画のしかた

9月3日(於中央公民館)は、「市政への市民参画のしかた」をテーマに、大阪大学基礎工学部の森住明弘助手から、



豊中市はごみ減量推進委員で公募するなど市民参加の先進都市だ、しかし参加はしたが、参画の仕方は手探りというのが現在の悩みと話されました。「これは日本の社会科学や教育にも共通する問題で、外からは観察するが内側に入って議論しないところがある。社会学者が社会活動の仕方を学んでいないし、職員と市民も共に仕事をする発想で話し合う訓練を経てない。その意味で今回のワークショップは意気込みとしてはいいことだが、前回のように主催者がテーマも進め方も上から降ろす方法は良くない。参画意識が生まれるようなプログラムを参加者と一緒に創っていくべきだ」と具体事例も交え話されました。その後の全体討議では自治会活動で大事なことは人数は少なくとも集まったひとで出来ることを続けること、市民は色んな方面のプロだから、こういう機会がどんどん提供され市民活動のコツを学んで実践して知り合っていくことが大切といった話が交わされました。

## 地域の問題解決力をサポートする『しかけ』と『しくみ』

10日(於市民会館)は、「地域の問題解決力をサポートする『しかけ』と『しくみ』」をテーマに、NPO政策研究所の直田春夫さんから、



まず参加者にとって「市政」とは何だろう、「市政研究」とは何だろうと問いかけられました。そして、現在、行政と市民・NPO・企業などの関係が変わりつつあること、起業家的市民や自律的市民型社会事業も出てきた。地域に必要なサービスを市民自身が考えはじめている。地域の問題を発見し解決の方向や具体的な対応策などが決まる過程に参画するためには、市民が力をつけることや協働型の研究活動、それをサポートする機関が必要と直田さんが提唱されているコミュニティシンクタンクの各地での事例を話されました。

グループ討議では、「駅前商店街がさびれてきた」「街路樹の落ち葉に近隣から苦情がきた」など4テーマで、問題を地域で共有するためにどう考えればいかなどを話し合いました。

この日は、ワークショップの最終日でもあり研究所から、こうした取り組みに対する今後の進め方への希望や意見をアンケートに書いていただくようお願いしました。

現在、3回の記録と最終日に配布したアンケートの整理中ですが、参加者のお2人から、この作業を手伝っても良いとの声があり、参加者がアンケートの集約や三回目の講義の概要などをお願いしました。研究所職員による講演録では役所風の本当に議事録といった内容で作りがちですが、元資料に講演要点を貼り付けた形で見やすく、また難解な単語などの解説も付けて下さいました。また名簿も従来形ではなく、メーリングリストとして機能するような工夫をいただきました。

今後の進め方に関しては、参加者からの提案や指摘などを整理し、話し合いの場を企画していくことにしています。研究所としては、参加者たちの中から市政に関して共通する関心を通して、自発的な情報交換や学習・研究活動のグループづくりにつながって行くようサポートして行くことにしています。(平尾)

---

---

## 市政研究セミナーを開催しました

調査研究の成果を基に市民や市職員と共に議論を深めるために、市政研究セミナーを開催しています。

廃棄物に関する意識・行動調査 「私のコミュニティ」でできる、ごみ減量方策を考える

平成14年9月19日(木)午後6時30分～ 中央公民館視聴覚室

報告者 村上 馨 助言者 野波 寛さん(関西学院大学助教授)ほか

市民公益活動を促進する条例の類型比較 新しいコミュニティづくりのために

平成14年9月24日(火)午後6時30分～ くらしかん イベントホール

報告者 太原 敏(豊中市法制文書課 平成11～13年度 市政研研究員)

助言者 中川 幾郎さん(帝塚山大学法政策学部教授)

高齢者の生活保障について セーフティーネットの再構築に向けて (予定)

平成14年10月30日(水)午後6時30分～ くらしかん イベントホール

報告者 弘中 伸明 助言者 大谷 強さん(関西学院大学経済学部教授)ほか

# ようこそ！学生さん

関西学院大学 インターンシップ学生に研究所の仕事を体験してもらいました

この夏（8月20日～9月6日）、研究所は関西学院大学総合政策学部の3回生4名をインターンシップ学生として迎えました。

研究所ではかねてから、市民や学生の方とどのように交流すればよいかを考えており、学生に関しての取り組みのひとつとしてインターンシップ制度による受け入れでした。

## 何故、インターンシップ受入か？

市政研でインターンシップを迎えるにあたり、

- 1) 地域社会に開かれた研究所として学生に職業体験の場を提供する。
- 2) 周辺大学、学生と交流することによって研究協力者ネットワークを開拓及び構築を図る。
- 3) 若い世代との交流の中で研究所業務を見つめなおす。という目的で臨みました。

そして学生の方には

- 1) 仕事内容を把握し企画する。
- 2) その企画を基に実践する。
- 3) そして評価する。

という目標で仕事を体験して頂きました。

## そして学生はどうしたか？

「市政研究ことはじめ」という市民と共に進める市政研究を考えるワークショップの運営を全てまかせました。テーマと講師の先生は既に依頼していましたが、ワークショップの司会進行が主な仕事となりました。

正直なところ、本当に市民の方を前にして上手く出来るのか非常に心配でした。そして参加者からの評価は「経験上良いこと」、「学生はよくできていた」といった良い評価が多数あった一方で、「敬語の区別がついてない」との厳しいご意見もいただきました。

緊張した司会進行を終え、自分が手がけたワークショップについて自己評価をしてもらったところ、「現実にはシナリオ通りうまくいかない」、「社会人としての言葉遣いになっていなかった」、「残りの学生生活を実社会と結びつけて学ぶ必要を感じた」、「初めて社会人から評価（良い悪い



事務局長から豊中市政の講義を受ける学生

含め)されて自分を認識できることができた」等、非常に貴重な体験だと総括していました。

彼らは確かに未熟な部分はあったかもしれませんが、この体験が若い人に対して、研究所職員だけでなく参加いただいた市民の方からも彼らの将来の飛躍へのきっかけを頂けたことに、本当に感謝しています。

今後はインターンシップ制度をより多くの大学から募りたくさんの大学生、研究者そして市民の交流の場にしていきたいと考えています。

(土井)



研究報告書を一色市長に届けました

# 研究所・見聞録

## 市民研究員制度にみる尼崎の心意気

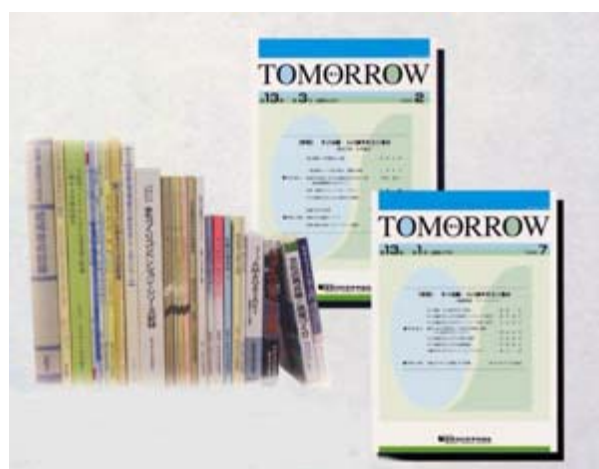
### あまがさき未来協会をたずねて

豊中市の隣接都市である兵庫県尼崎市にある（財）あまがさき未来協会をたずねました。昭和61年4月26日に尼崎市制70周年を記念して、尼崎の新しいまちづくりの総合的、専門的な調査、研究活動を行うために設立されました。開所以来数々の調査報告書、各種イベントなど多く手がけられ、昨年度からは市民研究員制度によって市民自らが「まちの研究」ができるように支援されています。

市民研究員制度は既にいくつかの自治体設立の研究所において、実施されています。あまがさき未来協会では「自転車」と「ごみ」というテーマで20名ほどの応募があり全員、委員となりました。その研究会には市職員、青年会議所そして研究者を含めてグループを組んで自主的に研究活動が行われました。

具体的な研究テーマは「快適で安全な自転車通行と都市を考える」と「生ごみの肥料化とその有効利用の可能性」の2本でした。

はじめてのこの制度、終了してみても市民の方からの要望や事務局としての課題、反省もあったようです。



数々の調査研究報告書



市民研究員研究報告書

市民の方からは、事前の基礎的学習の必要性が指摘され具体的には、研究の組み立て方、研究方法、データの活用方法、分析方法、市担当部局への聞き取り要点のポイントを最初に知っておくことが研究を進めるのに重要であることが上げられたようです。そして一番肝心なこととして研究成果が実際にどのように活かされるかということでした。研究成果を拝見させていただくと、本当に上述したような悩みがあったのかと思うくらい濃い研究内容でした。1つは、尼崎のことを良く知っているのはやっぱり市民ということが読んでいてわかること。2つ目はヒアリング、現地調査そして体験調査などたくさんの実態調査を市民研究員が自らされていること。そして3つ目が市民による生活者の視点を基に、研究テーマを交通規制、道路空間の再配分や交通教育など幅広い角度からの分析と解決提案をされていることです。行政の報告書であればなかなか踏み込めない内容もあり非常に興味深いものがありました。

そして、数々の研究実績や市民研究員制度によるを実施されている、お隣の街の研究所である「あまがさき未来協会」と「市民研究員」をキーワードに交流する予定です。（土井）

## 研究日誌 「千里ニュータウン 住宅地再生に向けた提言」研究報告会を開催

研究所は市と共同で千里ニュータウンに関する調査研究に取り組み、報告書「千里ニュータウン住宅地再生に向けた提言」をとりまとめました。提言の内容を広く市民・住民・関係者に説明することで、ニュータウン再生に向けた議論を進める契機にしたいとの願いを込めて、8月24日、9月1日に千里公民館で報告会を開催しました。なお参加者は8月24日60名、9月1日67名でした。



まず、討議資料（市政研や市企画調整室にあります。）に基づき研究報告を行いました。計画的につくられた千里ニュータウンの特質や現在の課題を述べた後、今後必要と考えられる施策のメニューを提示しました。住民主導による地域単位のプランづくり、地域の住民や事業者が地域を変える「しくみづくり」を重点施策として提案し、報告を終えました。



続いて行われた質疑応答では「集合住宅の建替えの際は、周辺の環境に配慮すべき」という意見の一方で、「市は建替えにもっと支援を」という声も出ました。また、住民主体のまちづくりを進めようという参加者からの呼びかけもありました。

今後も市とともに行う出前報告会等を通じ、ニュータウン再生に向けた取り組みについて住民と意見を交換していく予定です。当日は地元市民や住宅事業者、行政関係者等がたくさん参加して下さいました。

（村上）

---

### TOOL BOX(第4回) ツールとしての出島

前号の「研究所だより」で、この研究所を市役所の出島に喩えてみた。また、別のところで「江戸時代の三百年の閉鎖社会と比べるわけではないが、研究所が、行政が良くも悪くも持っている閉鎖性を開放し、新しい行政文化が生まれるスペースとなるよう育てほしい」とも書いた。ワークショップ「市政研究ことはじめ」は、その第一歩だった。ところでその第一歩はどうだったか。参加者からの反響は「講師の話をもっとじっくり聞きたい」「討議の時間をもっと」「テーマの決め方に参加者の意見を」「進め方を参加者に任せたい方がいい」など催しの持ち方に様々な声があった。今後の進め方では、「テーマを具体的にしたいほうが意欲ある人が集まる」「関心別のサロンを」「市政への注文でなく提案するグループなら参加」「参加型研究の結果が市政に生かされる制度が必要」「この取り組みの継続を」「メール上で意見交換を」など、より「開く」ことへの声があった。もう一つの質問「何

のためにワークショップをするのか」が、表現や強弱を異にしつつも質問やアンケートから伝わってきた。「開こう」とした面が前に出すぎたために、参加者にとっては、何のために「開く」のか、また開くことが参加者にどんな意味があるのか、という率直な疑問が生まれたにちがいない。「開く」趣旨の説明に時間をかけるよりも、講師からの話題提供と参加者の討議にウエイトを置いた進め方への批判でもあった。こうした批判を出島内部で、あるいは、本島である市役所との相互関係の中につなぐこと。また、一方の市民社会の側が、この出島を単なる行政の出先施設と見るのか、開くことが至上命題となっている今日、市民の財産として育てるべき場と見るのか。後者の見方が広がることが望ましいとすれば、出島内部ではどんな努力が必要なのか、運営面でのどんな改革が必要なのか。問いは限りなくつながっていく。（平尾）

# 出島・入島

## 研究所と市役所の交流ひろば～

### 「研究を政策にするマジックとは」

政策推進部企画調整室 主幹 白石 洋

「マジックだなんて、生来、不器用、音痴、運痴の私に語れる資格なんてあるわけじゃないじゃないですか？」テーマを聞かされたときの率直な感想です。

マジックで帽子から飛び出す鳩や咲かす花は、その場限りだけれど、行政は継続だから、丈夫で美しい鳩や花を育てるといわれます。

生むところだけ、植えるときだけ好きに考えて、後はうまくやってよネってそういうのはそれこそマジックでは？

関わるのなら、はなから一緒に、受けをねらったり（ニーズ調査）、シナリオを書いたり（理論付け）、手順を考えたり（手法の検討）するのが実際的では？でも、日々、口に糊していくことは大切だけど、そ

れただだと市役所とかわりがなかったりしてねえー。

孔子は河の畔で「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舍かず」っていったと聞けけれど、河の流れもゆっくり、大きく変わっているみたい。

一生懸命船を漕いでいる人には、流れの変化も先行きも、なかなか、みえないのでは。

そんな時、川岸からこの先に岩が！とか、渦が巻いてる！って、かけてもらえる声ってありがたいのでは？

しっかりした先行きの見通しをもって射た三本の矢ならしかり当たって、的にもこたえるのかも。

なんて、心に浮かぶよしなごと

## 理事会ダイジェスト

## 小さな研究所のさらなる発展のために



理事懇談会の様子

### ～理事懇談会が開かれました～

9月30日、来年度以降の研究所の進むべき方向を考える理事懇談会が開かれました。当研究所も設立6年目となり、現在10名の理事の任期も今年度末で終わります。今まで蓄積されてきた研究の成果も評価しながら、設立趣意書にある「豊中の新しい都市づくりに貢献し、市民生活の質的な向上に寄与する開かれた研究所」により近づいていくにはどうすべきかということについて活発な議論が交わされました。事務局側から、「今、豊中がどんな都市問題に優先的に取り組むべきかをきちんと掴めていない。」、「研究成果を市政に反映させる政策提言システムができていない。」、「いままでの研究協力者や周辺大学、市役所職員との連携がとれていない。」、「市民に開かれた研究所になっていない。」などの総括と市職員の広報広聴主任を対象したニュースレターなどのアンケート報告など（「事務局から」で詳しく報告しています）から浮き彫りになった課題や問題とその課題を解決していくためのビジョンと現行組織体制の改革アイデアを提案しました。

大久保理事長から、市政研究所の機能として、「批判精神の保持」「問題発見」「課題設定」「政策提案」「施策提案」「事業提案」「政策管理」「政策評価」「行政関連ツールの開発」「民主主義教育」などをあげられ、そして時代の要請への対応の必要性に配慮することが肝心であると述べられました。

そして理事からは、「たとえ財政的に苦しくても、他人の禰を借りたり（他の研究グループとの共同）、研究ネットワークの場を提供することにより実績をあげることができる。」、「市役所とは違う独自性をいかに持つかが研究所の存在意義だ。」、「豊中の身の丈に合った地域のガバナンス（統治）のあり方をうちだしていくべき。」、「行政の正当性が問われている現在、行政に対して政策的な課題を明確にしていくよう働きかけることが必要。」などの意見が出されました。今後、事務局で理事の意見を集約しながら、今後の理事会で新年度の体制を築いていくことにしています。（弘中）

## ニュースレターについてアンケート行いました。

前回のニュースレターNo.18を配布した際に、豊中市役所広報聴取委員の方を対象にニュースレターに対する印象などについてアンケートを実施しました。アンケートには57名の方がお答え下さいました。業務お忙しい中本当にありがとうございました。

さて、その結果ですが、予想以上に厳しいお答えが返ってきました。9割の方から、「読みにくい。」「読もうと思わない。」「自分の仕事には関係ない。」「読ませる工夫が必要。」とのご意見が多数占めました。また、研究所に対する印象をお尋ねする項目につきましても、これも8割の方から厳しいご意見でした。

少し紹介しますと「行政に対するアプローチを図らないと空論に終わる。」「財政難の折、研究成果がどう市政に活かされるのかをもっと知らせるべき。」「何をしているのか全くわからない。」「存在意義が疑問。」「存在すら知らない職員が多いのでは。」というものでした。

このアンケート結果を研究所職員全員（といっても6名の小規模な所帯ですが）で拝見し、大きなショックとともに今後、研究所がどのような方向に進

んで行くのか、待った無しで検討する必要性を感じました。このことは先の理事懇談会の席上でも報告し、来年度に向けての研究所あり方について議論していただき、年度内に新しい研究所の姿をまとめ来年度に実行していきます。

そして、このニュースレターも活字が多く読みにくいというご意見を受けて、紙面を大幅に変更しました。試行錯誤の中での取り組みですので十分とは参りませんが、出来ることはまずやってみようと思っています。

研究所の行事は、会議室での研究会やセミナーが大半ですので躍動感ある写真が撮れず（もちろん技量の問題が大きいのですが、どなたかご指導いただけませんか。）単調な写真になっていますが、読みやすいニュースレターに改良していきますので、お気づきの点はお気軽にお寄せ下さい。（土井）

### こどもについて考えています

- ・講演会「子どもをめぐる問題を考える」を開催します。

平成14年11月18日（月）14時～16時 中央公民館 視聴覚室

話題提供者：大阪府池田子ども家庭センター 藤井康雄さん

- ・機関紙「ビジョン22」No.6（2003年3月発行予定）こどもにまつわる問題を特集します。

現在、関係部局、研究者、専門家、地域の活動グループの方と「こどものこと」について話合っています。

### 編集後記

「市政研究所だより」の名前を含めて大幅に変更しました。「New Wave」は時代の変革期において新しい潮流を受けとめ波を発信していこうという意気込みで付けました。この号では、この夏に市民の方や大学生の方と交流することによって市民研究所としての道を走り始めたことを中心に編集しました。市民に開かれた研究所としてどのような姿、形が良いのか実際に走りながら、試行と修正を加えながら進めていきたいと考えてます。そして研究活動のより一層の向上とともに、より理解していただけるようなPRの一つとして読んでいただけるニュースレターとして、改良を重ねていきます。（土井）

**豊中市政研究所 TIMR**(The Toyonaka Institute for Municipal Research)

〒561-0802 豊中市曽根東町3-7-1

Tel 06(6862)-2290

Fax 06(6862)-2292

ホームページ

<http://www.tcct.zaq.ne.jp/timr>

E-mail

[timr@tcct.zaq.ne.jp](mailto:timr@tcct.zaq.ne.jp)